

---

# 夢喰いメリー 夢喰いと狂いサンタ

T-K

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢喰いメリー 夢喰いと狂いサンタ

### 【Nコード】

N8213Z

### 【作者名】

T-K

### 【あらすじ】

クリスマスも近くなつたある日の事、藤原夢路の通う学校でおかしな事件が。

「夢喰いメリー」のクリスマスの小説です。

アイデア思い付くのが遅くて結局間に合わなかったけど投稿します。前篇、後編に割かれます。

## 前篇（前書き）

クリスマスも近くなつたある日の事、藤原夢路の通う学校でおかしな事件が。

遅れちゃつたけど「夢喰いメリー」のクリスマスの小説です。

時代背景は、ノワール戦ちよつと過ぎかな？

ポジティブな夢路ともそれなりに友情が深まってると思うので、メリーはほんのちよつとだけ前向きな性格にしています。

作者が一部だけ設定を把握してない所が有るかもしれませんが、指摘などは遠慮なく申し出てください。

## 前篇

まだ朝早いと言うのにスーパーは色々とごった返していた。

クリスマスが近いが故の人ばかり。

サンタの服を着た店員が、一人のお客のお会計を済ませる。

そのお客は不思議そうな眼で店員を見つめた。

店員も不思議そうにそのお客を見つめた。

そのお客は白い帽子とミニスカートに白いコートという、変わった服装の少女。

おまけにへそ出しスタイルで、冬だと言うのに寒くないのだろうか？と疑いたくなる。

お客さんは会計を済ませ、店を出て行った。

直ぐ近くに置いてある、テレビからはこんなニュースが流れてた。

「ここ最近、この街の至る所で何者かの手で、勝手に家がクリスマス用のネオンを大量に包み込まれると言う事件が多発しています。

誰の犯行かは以前不明で、いずれも一晩で事を済ませており、警察は帖佐を進めており

」



突然夢路の背中に痛みが走らない程度で拳を叩きこむ者が居た。

白い帽子とミニスカートに白いコートという、変わった服装の少女。この少女の名は、メリー・ナイトメア。

彼女は夢路達が住むこの現実界うつつとは別に存在する世界、幻界ゆめの住人だ。

幻界の住人は夢魔むまといい、一見人間に見える彼女もその夢魔である。彼女は10年前、気付いたらこの現実界の地を踏んでいた。

現実界に居る以前の時の記憶が無く、彼女は偶然出会った夢路と共に自分が幻界ゆめに変える方法を探している。

メリーは買い物袋を持っていた。

「メリー？ どうしたんだ急に？」

「サナ（勇魚の事）のお父さんに、お使い頼まれちゃった」

「そうなのか」

「あ、そう言えばさ」

「ん？」

「さっき言った店の店員の中で、何か白い付け髭付けて、赤い服着た店員さんが居ただけで、何なの？ 去年のこの時期も似たような見た気がするけど・・・」

「ああ、そりゃあサンタクロースのコスプレだな」

「サンタクロース??」

「ああ、サンタってのはなあ・・・」

夢路はメリーにサンタとは何なのかを話した。サンタはクリスマス夜の夜中に橇で空を飛び、家の中に入って良い子の寝てる側にプレゼントを置いていく、優しい老人だと。

話を聞き終えたメリーは不思議がった。

「無償でプレゼント？ 何でそんな事するの？ 変な人間」

「そりゃあ、サンタも子供を思いやる心が有るからさ。年に一度の大イベント、子供達を楽しませたいっていう心がな」

「でも勝手に人の家の中は居るのって、不法何とかって奴じゃないの？」

「う、そ、それは・・・」

「夢路あんま子供に吹きこまない方が良いよ？ 居る訳ないんだしサンタなんて」

「居るさ。例え誰がなんと言おうと、俺は居るって信じてたいんだ！ メリーはどう思う？」

「私は・・・うーん」

夢路に振られ、一瞬考え込むメリー。

「そうね、良くは解らないけど、居ても良いんじゃない？だってまだ見たことも無いし」

「ホラ見る！ メリーだってこう言ってたんだ」

「ハハ、ハイハイわかったわよ」

「夢路って小さい頃から変わってないねそう言うところ」

「うむ、”何時の日も・夢信じぬく・大人の心” 秋柳 貴照」

夢路の力押しに、咲はこうさんしますと言う笑みで済ませ、貴照も趣味の川柳で場を和ませる。

「それにしても無償でプレゼントか・・・」

呟くと、頭の中に大好きなドーナツが山積みされてるのを想像するメリー。

少しよだれが出て来た所で気になった勇魚が顔を覗き込む。

「あらメリー、もしかして何か欲しい物あるの？」

「い、要らないわよ別に！」

「わっかかり易い奴」

「って言うか、メリーさんは冬でその恰好は平気なんでしょうかね？」

暫くそんな話をしてる間に皆は学校へ。が、しかし彼等が目にしたものは・・・

「な、何じゃこりゃあああああ！？」

夢路は目を見開いた。昨日までは何ともなかった学校全体がクリスマスイルミネーションを飾られていたからだ。

他の先生、教師達もこの状況に戸惑ってるようだ。

ふと、その学校の屋上で誰かが愉快そうに笑っているのが見えた。

「ハッハッハッハッハ！ 良いぞ良いぞー！ さああ、今日はクリスマスパーティーだあ！ 皆の宗、盛大にお祝いだあああ！ 私と一緒に遊ぼうぞおお！ ツはツはツはツは！」

「あ、アレって、確か同じクラスの杉原すぎはらくんだよな？」

勇魚が不安そうに首を傾げた。

「パーティーとか言ってるぞ？」

「え？ でもアイツ確か昨日まで・・・」

咲は昨日の昼休み、偶然聞いたとその友達の会話を思い出した。

【いやあ、もうすぐクリスマスだな〜】

【俺今度さ、バイト先のコンビニでサンタの着るんだぜ！】

【は？ 何がサンタだクリスマスだ。 お前今度その名前呟いた殺す！】

【わ、悪い。そう怒んなよ・・・】

【ドイツもコイツもクリスマスマスクリスマスとウザってえ！ あゝあ、良いよなゝクリスマスを楽しむる奴はよ。 彼女や沢山の友達と楽しいあまゝい一日を過ごせるんだからなゝ。 俺なんか親からしかサンタのプレゼント何か貰った事ねえつてのによ！ 今畜生！ クリスマスハンターーイー！ サンタもハンターーイー】

【高杉、落ち着けえ！】

「・・・って言ってたのに」

「あの大のクリスマス嫌いな彼が？」

「そう言えば、ここ最近街の至る所家を勝手にネオンで覆い尽くすって事件無かったな」

「まさか、その犯人が高杉くん!？」

「一体どういう事なんだ? (・・・まさか!)」

夢路は何を思ったか、自分の親指と人差し指で輪を作りそこから杉原を覗き見た。

実は彼、こうする事で他の人の夢の種類や雰囲気によって違った色のオーラのようなものが見え、そのオーラの色によってその人がこれから見る夢の大まかな内容を知ることが出来るというちょっと変わった特技を持っていた。

確率はイマイチ。だが絶対に当たる色が有る。 それは黒。 悪夢の色だ。

黒いオーラを発する人は必ず近々悪夢を見る。

そして、広志の色は・・・見事に真っ黒。

「夢路も気付いた？」

「ああ。杉原の奴、やっぱり夢魔に！」

メリーの問いかけに夢路の表情が一気に険しくなった。

夢魔は幻界<sup>ゆめ</sup>、いわゆる夢の世界の住人だ。

本来、現実の世界に出られない彼等（または彼女等）は人間の意識と体に乗っ取り、この世界に進出する。

夢魔に乗っ取られた人間は基本、器<sup>うつ</sup>と呼ばれるが、世の中にはこの器と友好的な関係になり共存している夢魔が居る。

だがそれとは別に夢魔の中にはこの能力を利用して、全ての人間達に乗っ取り現実界<sup>うつ</sup>を支配しようともくろむ危険な夢魔が居た。

その名は、エルクレス。

圧倒的な力を持つ彼は多くの夢魔達を仲間に入れ、自分に賛同せず人間と共存しようとする夢魔を片っ端から消去するという凶悪な男だ。

今の杉原の行動は明らかに昨日の行動とは反する物だ。

と言う事は彼の考えとは真反対の夢魔がとりついた可能性がある。

と考えれば、その夢魔はもしかしたらエルクレスの部下か？

「メリー、行くぞ！」

「オツケー！」

「え？ ちょ、夢路？ メリー！？」

勇魚と咲と貴照を置いて、夢路はメリーと共にクラスメイトの居る

屋上へと走る。

ひたすら廊下と階段を走り抜け、屋上へ出る為の扉にたどり着く。  
このドアを開ければそこには学校の屋上が広がる筈である。

夢路はコレを思いつきりこじ開けた。

しかし、そこに広がったのは……

「なんだ此処！？外国？」

夢路は目を丸くした。目の前に広がるのは、イタリアかロンドン、  
ニューヨークとも取れなくもない外国製の建物が大量にそびえ立ち、  
そのビルの全てがクリスマススの様にきらめき輝くネオンで埋め尽く  
されていた。

「へへ、随分おしゃれだけどこんなにあると逆に電気の無駄ね？」

メリーが皮肉をこめた笑みで呟いた時だった。

「はーはーはっはっはっは！メリークリスマス！メリークリスマス！  
ス！ハーツは、はははーはっはははあああ！」

目の前の遙か先に 白いラインの入った赤いレザースーツに身を包  
み、先の二つのとんがりが後ろに垂れた大きな赤い帽子を被った銀  
髪の男性が大きな高笑いしていた。両手の爪が異常に長く鋭い。  
何処かサンタクロウスを想わせる外見。どうやら彼が高杉に取り  
ついた夢魔の様だ。

「おや？ 珍しい。この私の白昼夢デイドリームに客人とは？」

夢路達の存在に気付いた夢魔が怪しい笑みで此方を見る。

「お前、エルクレスの仲間か!? 何が目的か知らねえが、とつとコイツの体から離れる!」

「エルクレス? さあどうだろうね。嫌だと言ったら・・・?」

サンタ似の夢魔が口を三日月の様にして邪悪な笑みを浮かべた時、

彼の頭上からメリーが協力なかかと落としを仕掛けて来た。

間一髪それを避けた夢魔。攻撃はそのまま地面に直撃し、そこに大きな亀裂が入る。

同時に、メリーは不敵な笑みと共に夢魔を睨みつけ、叫んだ。

「送り返す!」

後半へ続く……………

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8213z/>

---

夢喰いメリー 夢喰いと狂いサンタ

2011年12月26日01時56分発行